

焦らず、あきらめず、 置かれた環境で ベストを尽くす

Profile

すが の き さら
菅野 綺更さん

東京生まれ。2016年3月東京都立両国高等学校卒業。2020年3月東京理科大学経営学部ビジネスエコノミクス学科卒業。2022年3月青山学院大学会計専門職大学院修了。同年4月より、大手税理士法人に入社。2024年8月に退職、結婚し、2025年より米国ボストン在住。

ボストンでの「充電期間」

マサチューセッツ工科大学の博士課程で学ぶ夫に帯同し、現在はボストンで暮らす菅野綺更さん。結婚前は日本で外資系大手税理士法人に勤めていた。現在は配偶者ビザで滞在しているため、働くことができない。いつ仕事に復帰できるのか、先の見えない状態に焦りを感じることもあるという。

それでも「昔から、置かれた環境の中で頑張るタイプでした」と前向きだ。今は“充電期間”と位置づけ、ボストン市内の語学学校で英語力を磨きながら、将来的には米国公認会計士資格の取得も視野に入れ勉強をしている。

海外への憧れと、努力の原点

東京都江東区に生まれた菅野さんは、活発で体を動かすことが大好きな少女だった。両親は共働きの会社員。

「忙しくて普段は一緒に過ごす時間が少なかったのですが、毎年グアムやサイパンなど海外旅行に連れて行ってくれました。6歳のときには母とオーストラリアでホームステイをし、現地の幼稚園に通ったこともあります」

家庭ではディズニー映画を英語音声で観たり、アメリカの幼児番組をよく観ていたという。オーストラリ



アでは、マイノリティであることに戸惑った経験もあるが、英語に触れる機会が多かったことから、漠然と「海外」に憧れるようになったという。

両親は教育熱心で、菅野さんは小学1年生から塾に通い始める。3年生からは進学塾に通い、中学受験を目指した。塾は毎日夜10時まで。「なぜ自分だけこんなに勉強をしなければならないのか」と、親に反発したこともあったが、第一志望の都立中高一貫校に合格。勉強漬けだった日々から一転し、学校生活を満喫する。

バレーボール部に所属し、エースアタッカーも務めた。「どんなボールも打ち返す」粘り強さは、このときに培われたものだ。この体育会系の精神力は、後の社会人生活でも大きな支えとなる。



幼少期、サイパンに行った時の写真。教育熱心な両親には、さまざまな体験をさせてもらった。



6歳のときにオーストラリアに母とホームステイ。現地の幼稚園に通った。マイノリティゆえに仲間外れにされた記憶もあるが、英語圏への憧れはこの頃から培われた。

進路への迷いと、理科大との出会い

高校2年生で大学受験を意識し始めた。周囲は勉強のできる人ばかりで、早くから受験勉強に取り組んでいた。部活しかしてこなかった菅野さんは、焦りを覚えたという。

当時通っていた高校では、校長と一対一で進路面談を行っていた。その時校長から「あなたはスポーツしか取り柄がないのだから、スポーツ系に進学しなさい」と言われたことが転機となる。

「絶対に嫌だ、と思ったことがきっかけで勉強に火がつきました」

理系志向はあったものの、明確な将来像はなかった。社会人経験のある大人の意見を聞こうと両親に相談。会社の仕組みやビジネスの実情を教えてもらい、「将来が明確でなくても、経営や財務を学べば幅広い職種に対応できる」という助言を受けた。

なるほどと納得したもの、具体的な大学や学部迷っていたところ、父親が大学・学部ごとの履修内容や試験科目を一覧にしてくれた。その中で強く勧められたのが、2016年に新設された東京理科大学経営学部ビジネスエコノミクス学科だった。

経済学や会計学に加え、プログラミングも学ぶカリキュラム。数学を使って社会を分析するという発想に、将来性を感じた。

「ビジネス全般はもちろん、最新のトレンドも押さえていて、社会に出てから広く役立つと思いました」

こうして菅野さんは、学科の第一期生として東京理科大学に入学することになった。

ゲーム理論との出会い

「大学の勉強は本当に楽しかった」と振り返る。なかでも心をつかまれたのがゲーム理論だった。企業の価格競争や最適立地、マッチング理論など、抽象的だった数学が現実の経済活動と結びつく瞬間に、「学びが社会につながる」実感を得た。

梅澤正史教授のゼミに所属し、授業に参加するだけでなく下級生の授業アシスタントも務める。このとき、他の学科から転科してきた現在の夫と知り合う。

梅澤ゼミは結束が強く、よく合宿にも出かけたという。バーベキューなどのアクティビティも楽しかったが、合宿中に、卒論発表会の時間があり、この経験は、論文執筆のスキルや、専門的な内容を分かりやすく伝える力を養った。

就職か、資格か——強みを求めて

大学4年生になると、大きな葛藤が生まれる。就職活動で、いろいろな企業を訪問し、一度は「就職をしよう」と決めていたが、「自分に足りないもの」も見えてきた。「みんながするから就職する、というのは嫌。何か強みを持ちたい。資格を取った方がいいのではないかと悩みました」

MBAか税理士資格かで迷い、梅澤教授に相談し、税理士になる道を選択する。「梅澤教授には、進学や資格取得、就職先に至るまで、節目ごとに助言をいただきました」と今でも感謝している。

公認会計士になるか税理士になるかでも迷った。大



勉強はそっちのけで部活に熱中した高校時代。バレーボール部で、エースアタッカーだった。



大学のプログラムで、夏休みにアメリカ・ポートランドに短期留学。スクールバスで校外学習に出かけるところ。

きな違いは、公認会計士は、企業を監査するという立場であり、税理士は、企業に寄り添い支える立場であるということ。

「企業と敵対するより、企業から感謝される存在でありたい」——それが決め手だった。

税理士になるには、会計学2科目と、税法3科目の計5科目の科目試験に合格する必要がある。大学ではこれらを学んでいなかったのも、法律と税務を一から体系的に学ばなければならなかった。菅野さんは、税理士試験の科目免除がある大学を調べ、青山学院大学会計専門職大学院へ進学。判決文の読み方や条文解釈、職業倫理などを学んだ。特に職業倫理の授業では、専門家としての責任の重さを実感し、強く印象に残っているという。

激務の先にあった成長

大学院2年生の夏、「4大税理士法人に入りたい」という強い思いを胸に就職活動を開始。

「大きい会社ほど、できる業務の幅が広いですし、新聞に載るような大きな業務提携にも携われる。海外でも知られる有名企業に憧れがありました」

税理士資格取得までは、あと1科目を残していたが、1つめの会社ですぐに内定を得た。2つ目の会社も内定。しかし、フラットで風通しの良い社風が気に入って1つ目の会社に就職。国際税務やM&Aに関わる部署で、日本企業や外資系企業の税務申告、税務リスクの調査業務などに携わった。

仕事は過酷だった。「繁忙期には10社以上を同時に担当し、深夜まで申告書を作成する日々でした。徹夜もめずらしくないほど忙しかったですね」

申告書提出の締め切りから逆算して、やるべきタスクを細かくスケジュールリングしていたが、思うように進まないこともある。常に追い立てられる状態で、激



大学卒業時。コロナ禍だったため卒業式は行われなかったが、ゼミ生だけ集まって卒業を祝った。隣にいるのは同じ学部・学科だった後の夫。

務に耐えられず辞める人も少なくなかった。

それでも菅野さんは、精神的に辛いときこそ出社すると決めていた。「リモート勤務も認められていましたが、家で落ち込むより、皆が頑張っている姿を見たほうが前向きになれて良いと思っていました」

締め切り直前にトラブルに見舞われることもあったが、決して逃げなかった。「どんな球も返す」精神で交渉し、周囲と連携して乗り越えた。

「去年はこなせなかった業務量が、今年はこなせたな」と1年ごとに自分の成長が実感できることが励みになった。

やりがいとは、専門的な内容を丁寧に説明しクライアントに理解してもらえた瞬間。複雑な税務リスクを整理し、言語化し、納得してもらう。「大学時代のゼミ経験が生きていると実感します」。

近年、生成AIによって税務業務が代替えられる可能性も議論されているが、菅野さんは、「願ってもないこと」と冷静だ。「申告書作成が生成AIで自動化できるなら、業務効率が格段に向上するので大歓迎です。しかし最終判断と責任を負うのは人間。法の解釈とリスク評価は、生成AIには難しいと思います」

次の挑戦へ

2年半勤務した後、結婚を機に退職し夫と共にボストンへ。キャリアを中断することへの躊躇はあったが、外資系企業で働く菅野さんの周りにはさまざまなバックグラウンドの同僚がいた。自分もグローバルな視点を持つ必要があると思っていたし、一度はアメリカに行ってみたいという気持ちもあり、渡航を決意した。

「この2年半は、社会人としても、人としても大きく成長できた期間でした。タスク管理の仕方、ピンチ



税理士法人に勤めていた頃、激務を共に乗り越えた仲間たちと。忙しい中でも時間を見つけてよく遊びに行った。

の切り抜け方、クライアントとの上手な意思疎通の仕方など、厳しい環境だったからこそ成長できたし、柔軟性やコミュニケーション力が身についたと思います」

これまで税理士法人としてクライアント企業をサポートしてきたが、「今度は事業会社に入って税務の仕事をしたい。クライアントの立場から、税理士法人を見ることで、どんなサービスが求められているのかが見えてくると思うからです」と話す。その後、再び税理士法人に戻る道も視野に入れている。

最近、小さな米国企業から、ビザ取得を前提に内定も得た。国際税務の知識と英語力を掛け合わせれば、新たな強みになるだろう。

つらくても乗り越える自分が好き

菅野さんに、将来の夢について聞いてみた。

「これだけ教育に力を入れて育ててくれた両親には感謝しかありません。その恩を、社会に価値を提供することで返したい。日本にとどまらず、グローバルに働けたらうれしいです」

夫の博士課程が修了する 2029 年までボストン滞在が決まっている。その先は、帰国するのか、アメリカにとどまるのか、それとも別の国に向かうのか、まだ何も決まっていない。先の計画が立たないことにやきもきするが、それでも、「せっかくアメリカで暮らすというチャンスをいただけた。この期間に、どこへ行っても通用する強みを身につけたい」とどこまでも前向きだ。

「つらくても乗り越える。そんな自分が好きなんです」



最近の写真。ボストンから飛行機で約 1 時間、憧れのニューヨークに。夫のおかげで貴重な経験ができていると感謝している。

高校生へのメッセージ

「私は、親が敷いてくれたレールの上を歩んできましたし、レールを逸脱することに漠然と不安を感じていました。でも就活で立ち止まったときから、親の敷いたレールではなく、自分で道を選び始めたのだと思います」

これから進路を選ぶ高校生へ伝えたいのは、「レールを外れることを恐れなくて」ということ。

「周りに流されるのではなく、自分で選んだ道が正解。本当にやりたいことは何か、立ち止まって考える時間を持ってほしいです」

答えが一つに定まらない人生の方程式。それでも菅野さんは、与えられた条件の中で最適解を探し続ける。大学で学んだゲーム理論の思考は、今も生きている。



取材を終えて フリーライター／石井栄子

外見からもソフトな語り口からも、体育会系とは想像もつかなかったが、言葉の端々に垣間見える、芯の強さはどこからくるのか。「どんな球でも打ち返す」という精神が部活で培われたと聞いて納得した。「落ち込んでいるよりがんばっている自分のほうが好き」という菅野さんの次なるチャレンジが楽しみだ。